



## 能忍寺たより

## 行事紹介

## ○降誕会(こうたんえ)

降誕会(こうたんえ)とは、仏教の開祖であるお釈迦様や、各宗派を開いた宗祖(開祖)がこの世に誕生されたことをお祝いする法要のことです。「降誕」という言葉には、聖者が天から下り、この世に生まれてくるという意味が込められています。

仏教において最も代表的な降誕会は、4月8日に行われるお釈迦様の誕生祭で、一般的には「花まつり」の名で親しまれています。しかし、降誕会はお釈迦様だけのものではありません。各宗派においても、自分たちの教えの源流となった師の誕生を祝う大切な日として位置づけられています。例えば、浄土真宗では親鸞聖人の誕生日である5月12日、真言宗では弘法大師(空海)の誕生日である9月15日に、それぞれ盛大な降誕会が営まれます。

これらの行事は、単なる歴史的な偉人の誕生日を祝う記念日ではありません。「もし、この方がこの世に生まれ、尊い教えを説いてくださらなければ、今の私は救いの道に出会うことができなかった」という、時を超えた深い報恩と感謝の心を捧げる日なのです。新緑や花々に彩られた季節に行われることが多く、仏教徒にとつて一年の中でも特に晴れやかで、心温まる節目となっております。

## 今月のことば

## ○拔苦与楽(ばつくよらく)

「拔苦与楽(ばつくよらく)」とは、仏教が目指す究極の理想であり、「慈悲」という言葉の真意を表した四字熟語です。文字通り「苦を抜き、楽を与える」ことを意味します。前半の「拔苦」は、他者の悩みや苦しみを取り除こうとする「悲(ひ)」の心、後半の「与楽」は、他者に安らぎや喜びを与えようとする「慈(じ)」の心に対応しています。

これは単なる一方的な親切ではなく、相手の痛みを自分のこととして共感し、寄り添う深い知性を伴った行動を指します。自分一人だけの幸せを求めるのではなく、生きとし生けるものすべてが苦しみから解放され、真の幸福を得られるようにと願う、仏教の利他精神を象徴する美しい言葉です。

## コラム あれもこれも仏教用語

## ○謙虚

「謙虚」という言葉は、現代では「控えめで素直な様子」を指しますが、そのルーツは仏教の教えに深く根ざしています。仏教において「謙」は自分の徳を隠して誇らないこと、「虚」は心に先入観や執着を持たない「空」の状態を意味します。つまり、単に自分を低く見せるだけでなく、自分の「我(エゴ)」を捨て去り、ありのままの真理を受け入れようとする精神性を表しているのです。

私たちはつい自分を大きく見せようとしがちですが、本来の謙虚さとは、自分の未熟さを認め、他者や万物から学ぼうとする「心の広さ」を指します。この謙虚な姿勢こそが、仏教における悟りや、豊かな人間関係を築くための第一歩とされています。

## 旦那の語源

## ○分け与える「布施」を意味する言葉

お日常的に使われている「旦那(だんな)」という言葉ですが、そのルーツを辿ると、実は古代インドの言語であるサンスクリット語に突き当たります。

語源となったのは、サンスクリット語で「分け与える」「布施」を意味する「ダーナ(dāna)」という言葉です。仏教において、見返りを求めずに慈悲の心で金品や教えを施すことは、修行者が積むべき重要な徳の一つとされてきました。この「ダーナ」が中国で「檀那(だんな)」と音写され、日本へと伝わったのです。

もともと仏教の文脈では、お寺や僧侶を経済的に支える支援者や寄進者のことを「檀那(または檀越)」と呼んでいました。つまり、宗教的な活動を裏から支える強力なハトロンを指す尊称だったわけですね。現在でも、特定の寺院に所属して支援する家を「檀家(だんか)」と呼ぶのは、この名残です。

江戸時代に入ると、この言葉は宗教的な枠を超えて広く使われるようになります。奉公人が雇い主を呼ぶ際や、商人が得意客を敬って呼ぶ際に用いられるようになり、次第に「一家を支える家長」や「夫」を指す敬称として定着していきました。

このように、もともとは尊い布施行を行う人を指した言葉が、長い年月をかけて「頼りになる存在」や「一家の主」を象徴する言葉へと変化していったのです。言葉の歴史を紐解くと、そこには深い敬意が込められていたことが分かります。